は進んでおらず真比重も高かった。ここ以外は下層の方が腐植化が進んでいた。

注）富山和子「ニホンカモシカ私論」S54.文芸春秋12月号　p.286～311

「新潟県山古志村の過疎現象に関する地理学的考察」

前川律子

山古志村は，越後山地の前山にあたる東山山地の西南端に位置している。東山山地は，一般に200～500mほどの標高を持つ丘陵性山地帯であるが，褶曲山脈であるため，その地形は復雑で，長い間，村内の集落間や村外との交通を阻んできた。このような地形と関係して，冬期の降雪量は多く，最大積雪量は，平均的な年で約3m，豪雪の際には5mにまで達するのである。また，この村は，第三紀層地すべり地帯としても知られている。このような自然環境下にあり，陸の孤島とも言うべき別天地であった山古志村にも，昭和30年代半ばからの高度経済成長の波は容赦なく襲いかかり，それを機として急坂を転がり落ちるような過疎化が始まったのであった。本論文は，人間と自然との調和が叫ばれ，山古志など山間の村に対する社会の要請が変りつつある中で，多少の落ちつきを見せ始めている「過疎現象」というものを，そこに暮す人々の生活や心情，またその歴史を映し出す鏡として見つめ直し，山古志における過疎現象の特質を浮き彫りにし，その本質を探ることを目的としている。そのため，まず，山古志村の人口構造や人口異動について把握し，次いで過疎現象に関わる諸条件から，村内における過疎現象の地域的差異を検討し，さらに，村役場による生活意識調査や聞き取り調査より窺われる住民の心情を加えて考察した。

山古志村の過疎現象の特色としては，東竹沢を始め，南平，種苧原等，村の東部の各地区において，竹沢，虫亀等西部よりも著しい人口・世帯数の減少が見られること，東竹沢や種苧原において，集団移動とも言うべきまとまった離村が見られるのに対し，竹沢，虫亀では，あちらで1軒，こちらで1軒というぱらぱらとした離村が見られること，村の東部と西部を比べると，西部において東部よりも人口減少率のピークを迎える時期が早かったこと，挙家離村者数の推移を見ると，昭和30年代半ばから現在にかけて昭和43年，44年をピークとする自然な山型を描いているが，ただ48年のみは例外的にその値が小さいこと，高等学校の新規学卒者のほとんどは，村外へ転出するが，新規学卒者以外の若者の転出，転入では，男子は両者がほぼつりあい，女子はむしろ転入超過の傾向にあること，人口ピラミッドは，かってのロケット型から不安定なひょうたん型に移行したこと，などがあげられよう。

過疎現象と諸条件との関わりについては，一般に次のような傾向が認められよう。すなわち，根雪期間の長い地区，出稼ぎ率の高い地区，傾斜角度の大きい地区，地形的遮断性の見られる地区，地すべり運動の活発な地区，養鯉農家率の低い地区，農業への依存度の高い地区，同族共同体的性格の強い地区，山古志村として合併される以前の行政区分の名残りの見られる地区，道路状況（舗装率など）が悪く，無雪化も遅れている地区，ＤＩＤ都市までの所要時間の長い地区，夜間救急時の加療までの所要時間の長い地区において，人口・世帯数の減少率が大きいのである。出稼ぎは，閉ざされた生活を送ってきた村人たちにとって，外の世界と直接接し，その刺激を受ける機会であり，またそれ自体村にとどまったままでは生活できないことを意味している。地すべり現象は，土壌攪乱や緩傾斜地の

形成など，山地農業の発達の一要素でもあるが，農業の経済的地位が低下した現在，その災害としての面がクローズアップされていると言えよう。錦鯉を育てる養鯉は，これといった産業のない山古志村において，大きな位置を占めており，昭和48年における挙家離村者数が非常に少ないのも，その直前の錦鯉の景気上昇によるものと思われる。同族共同体的性格やかつての行政区分の名残りは，「結束」を意味し，ある程度までは，むしろ人口減少の歯止めとなるが，それを越えると集団的移転につながりやすい。道路状況については，その改善が人口流出を呼ぶ場合もあり，引越し作業が容易になること，村外と接する機会が多くなること，道路整備の際受け取った立ち退き料を移転資金とし得ることなどが考えられよう。しかし，以上のような諸条件は互いに復雑に関わり合っている上，ひとつの地区においていくつもの条件が同時に働くため，実際はこれほど単純ではない。さらに，村全体に亘って過疎化を促しているものとしては，生活用水の不足，マスコミなど村の外側からつくられる，「後進地意識」があげられる。また逆に過疎化の歯止めのひとつとなり得るものとしては，国の重要無形民俗文化財である「牛の角つき（闘牛）」があげられよう。今後の山古志にとって大切な，村の伝統を守り，村に生きていくという自信と責任感につながるように思われるからである。

前橋市の市街地の形成

広　沢　智恵子

1. 目　的

現在，人口26万人の前橋市は，戦後大きく発展した群馬県の県庁所在地である。前橋市の発展は，市街地の拡大・発展そのものによく反映され，市街地の発展は，住宅地の発展に代表される。そこで，市街地の形成を住宅地に焦点をあてて考察を行うことにした。考察の中心は，住宅地の形成に働く要因を解明することである。

2. 枠　組

まず，第1章で自然環境・人文環境の面から前橋市を概観し，第2章では，古代から現代まで歴史的に考察した。地域により，住宅地形成の要因が異なると思われたので，客観的方法で（主成分分析）地域区分した。これが第3章である。第4章では，主成分分析の結果得られた3地域より，代表となる町を選び，アンケート調査を行い，興味ある1地区についてフィールド調査を行った。これらの結果をまとめ，考察を行ったのが第5章である。

3. 結　果

考察の結果，住宅地形成には必ず何らかの要因があり，私が調査し考察した範囲では「地の利」「政策」「計画」の3要因があることがわかった。

「地の利」が要因になっているのは，前橋市中心部の桃井地区である。かっては，都市的恩恵を求め永住するための住宅地が形成されたが，核家族化が進み新市域へ独立して流出し，ドーナツ化現象をひき起こしているが，現在では社宅・公務員用住宅地として以前とは異なった目的を持つ人々により，住宅地が形成され維持されている。